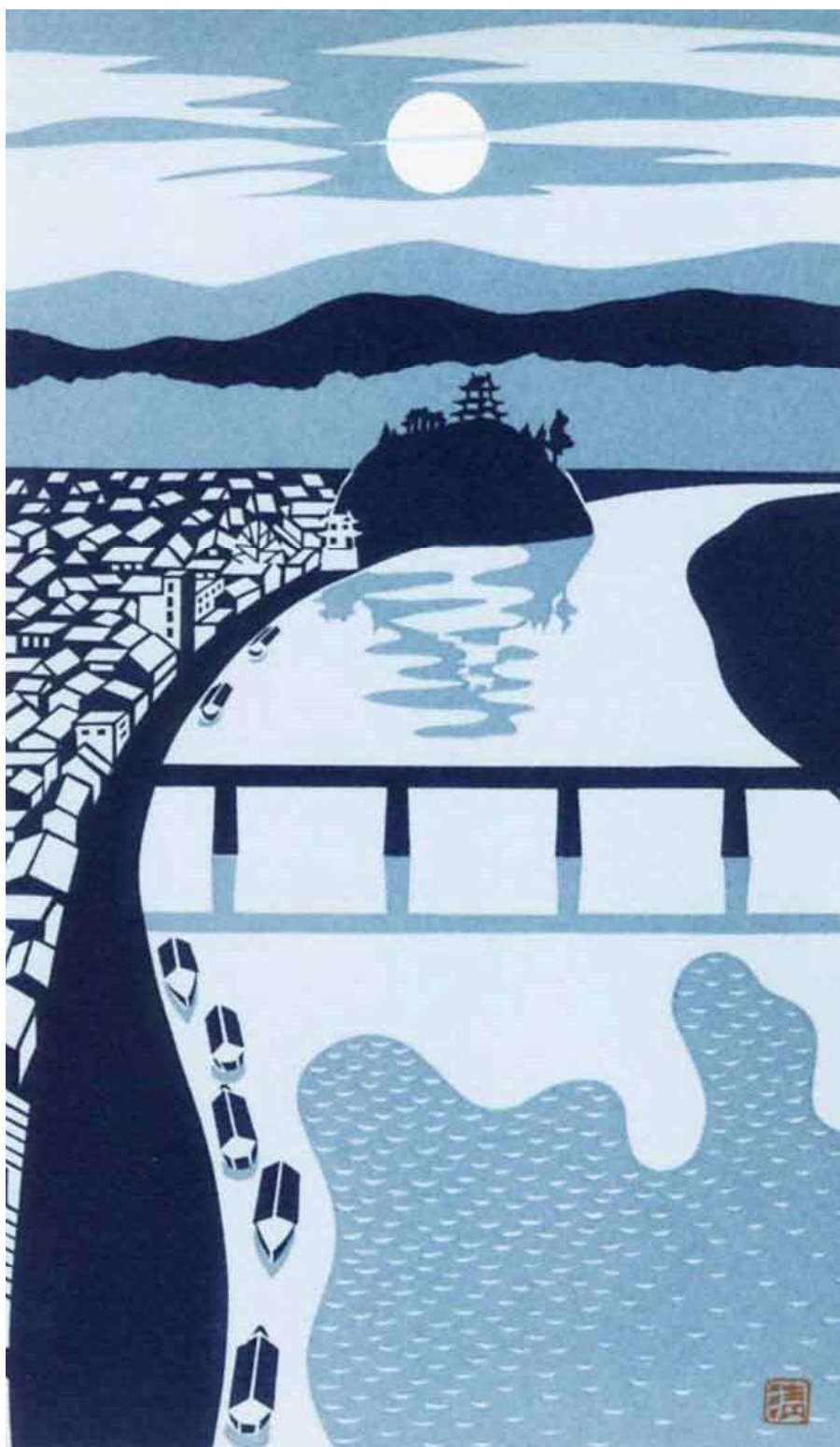


# いしづち

2015.9

No.106

公益社団法人 愛媛県建築士会  
<http://www.ehime-shikai.com>



松村正恒 語録 最終回

故きをたずねて

竹のはなし



1	松村正恒語録	フランク・ロイド・ライトについて	……①
2	故きをたずねて	太山寺本堂 見せ方の演出 文化財・まちづくり委員会 委員長 花岡 直樹	……②
3	竹のはなし	山田竹材 (その四) 山田 竹材 山田 清昭	……④
4	業・技	DNA 松山支部 新多 賢一	……⑤
5	光のはなし	鯖大師本坊の照明 宮地 電機 株 田部 泉	……⑥
6	しつらひ	居心地 松山支部 東 優	……⑦
7	自然と家とにんげんと	目に見えない心地よさ 今治支部 橋詰 飛香	……⑧
8	夢・現	松山建築楽会 松山支部 玉乃井公和	……⑨
9	委員会報告	青年・女性建築士の集い中四国ブロック大会 (尾道) 報告 女性委員会委員長 大塚美由紀 ……⑩ 松山支部 生熊 有子 ……⑩ かつての「尾道三部作」のまち、尾道にて 松山支部 河合 優志 ……⑪ 旧武蔵修理工事見学会報告 女性委員会副委員長 下元 美恵 ……⑫	
10	支部報告	建築巡礼 in 松山VIIに参加して 建築士による木造住宅倒壊模型製作 松山支部 和田 崇 ……⑬ 松山支部南地区・東地区 有 志 ……⑭	
11	けんちくの輪	人生を豊かにしてくれる建築士会 きっかけ 松山支部 近藤 岳志 ……⑯ 松山支部 長岡 康広 ……⑰	
12	お知らせ	平成27年度 第2回理事会報告 (概要報告) 事務局 ……⑱ ネパール大地震義援金のお礼 理事 (大洲支部長) 神田 孝一 ……⑳ 平成27年国土交通大臣表彰に寺尾保仁さん受賞 ……㉑ 山田きよ版画展・編集後記 ……㉒	

※ 尚、表紙及び本誌記事の無断転載を禁じます。



### 版画

題：水郷おおず  
山田 きよ

〔表紙の版画について〕

大洲は「水郷大洲」と言われるように、中心部を流れる肱川の存在が大きい。夏には「うかい」、そして三夜打ち上げられる花火大会、秋には「いもたき」と、この地の人々がいかに肱川を大切に生きて共存してきたかが伺える。「水郷おおず」(2004)は、そんなロケーションを単色濃淡で対象物を簡略化し、版画らしさを求めた作品である。

表紙作者 山田 きよ プロフィール

1959 喜多郡五十崎町 (現内子町) に生まれる  
1980 松山デザイン専門学校卒業  
1982 広告デザイン会社を退社し、家業の竹材業に就く  
1988 独学で切りぬき手法のシルクスクリーン版画を初制作  
以後、内子町内子座や大風合戦のポスターを手がける  
1993 初の個展  
2003 愛媛県文化協会奨励賞  
2012 個展回数が100回となる

(本名 山田 清昭 内子町在住)

# フランク・ロイド・ライトについて

ライトは有機的建築を、最後まで説き続けた。

ル・コルビュジェ、グロピウス、ミース・ファン・デル・ローエなどが、機能主義建築を唱道していた時代、孤立しても自分の説を曲げなかった。

有機的とは、人間性の尊重、血の通った、人間心理を、考慮した材料の肌ざわり、ぬくもりを尊重した点にある。未来の建築と云うより人間の正しい生き方、理想を彼は「建築」を通して人類に示している。

そこが、先見性に富み凡人でない証拠である。即ち人間は、日常の仕事に追われて生活すべきでない。それは、自分の意志でない、職業の奴隷である。

理想は、仕事が、生活が楽しい、生き甲斐がある。機械的に、機械に働かされるのではなく、創意工夫しながら生活する。それが職業になる。

職業でもって他人に奉仕するのでなく、職業が、その人に奉仕する生活と生命が輝く時、人は幸福と言える。それを、彼はタリアセンで実行した。ライトは建築を通じて人類の魂をゆさぶり、生きる喜びを与えたかったのである。建築は、その手段であった。目的は、人類の幸福にあった。偉人の所以である。彼は人類の未来をいつも考えていた。

シュヴァイツァーに比すべき人物であった。建築の技巧ぐらいで評価してはならない。勿論、ライト様式で世界に影響を及ぼした点も、また偉大である。

フランク・ロイド・ライトについて  
 ライトは有機的建築の理想を  
 具現化した。少くも、ミース・ファン・デル・ローエ  
 等の機械主義建築を唱道して  
 いた時代、孤立しても自分の説を  
 曲げなかった。

有機的とは、人間性の尊重、  
 血の通った、人間心理を、  
 考慮した材料の肌ざわり、  
 ぬくもりを尊重した点にある。

未来の建築と云うより、  
 人間の正しい生き方、理想を  
 彼は「建築」を通して  
 人類に示している。

そこが先見性に富み凡人  
 でない証拠である。即ち人間は、  
 日常の仕事に追われて生活する  
 べきでない。それは、自分の意志  
 でない、職業の奴隷である。

理想は、仕事が、生活が  
 楽しい、生き甲斐がある。機械  
 的に、機械に働かされるのではなく、  
 創意工夫しながら生活する。それが  
 職業になる。

職業でもって他人に奉仕する  
 のでなく、職業が、その人に奉  
 仕する生活と生命が輝く時、人は  
 幸福と言える。それを、彼は  
 タリアセンで実行した。ライトは  
 建築を通じて人類の魂をゆさ  
 ぶり、生きる喜びを与えたか  
 ったのである。建築は、その  
 手段であった。目的は、人類の  
 幸福にあった。偉人の所以であ  
 る。彼は人類の未来をいつも考  
 えていた。

シュヴァイツァーに比すべき  
 人物であった。建築の技巧ぐ  
 らいで評価してはならない。勿  
 論、ライト様式で世界に影響を  
 及ぼした点も、また偉大であ  
 る。

## 第2回 太山寺本堂 見せ方の演出（松山市太山寺町）

故きをたずねて

第2回は、太山寺（真言宗、四国霊場第52番札所）をご紹介します。本堂は県下で3棟の国宝（建造物）の一つで、昭和27年の解体修理によって、嘉元3年（1305）の再建であることが判明しました。鎌倉後期のもので、この地で700年以上の歴史を見てきたこととなります。建物は、桁行（正面）7間、梁間（奥行）9間で、密教本堂としては最大級の大きさです。屋根は入母屋造で本瓦葺きです。間口に対して奥行が寸法比で約1.3倍あるので、屋根の大棟は高くなり、威厳に満ちたたずまいとなっています。その本堂の「見せ方」には、いつお参りに行っても感動させられます。



山門への石段を登って行く。



登り切ったところで本堂の外壁面が見える。

一の門から入場し、二の門にあたる二王門を潜り、木々が生い茂った参道を突き当たると、右に直角に折れて急

文化財・まちづくり委員会 委員長 花岡 直樹  
勾配の石段の上に山門（楼門）がこちらを見下ろす様に建っています。石段を登って山門の入り口に立った時点で本堂の正面の外壁面が見えてきます。

「どんな建物だろう」と思いながら山門を潜り抜けたその瞬間、屋根を含めた本堂の全容が、ぱっと目に飛び込んでくるのです。

遠くから全体が見えていてだんだん大きくなる、では面白くありません。この瞬時に現われる見せ方こそが演出なんだな、と感心させられるのです。



門を潜ると本堂が一気に姿を現わす。

鎌倉時代後期に出現した正面が7間のお堂、いわゆる「和様七間堂」は、それまでの五間堂を単純に2間拡大したものではなく、それとは別個に開花した従前とは異なる新しい均衡美を志向した建築文化であると言われて



兵庫の太山寺本堂

います。これらの中で現存する鎌倉期の七間堂は、全国に2棟しか残されていません。

もう一つは、兵庫県神戸市西区伊川谷町にある、奇しくも同名の太山寺（天台宗）本堂です。建築年代は愛媛のものより10年遡りますが、正面7間の柱間をすべて蔀戸とすること、内部の平面構成を手前より外陣、内陣、後陣と配列するなど、その設計思想に共通性が見いだされます。もちろん国宝に指定されています。

この愛媛と兵庫の太山寺には、偶然かも知れませんが、面白い共通点がもう一つあるのでご紹介したいと思います。

それは二王門のことで、愛媛の太山寺の二王門（国の重要文化財）は、こちらも鎌倉時代の建立で、参道の途中の石段の上に建っています。今は門の北側の道を通るようになっていますが、鎌倉期にはもちろん車などなく、歩いての参拝でした。車社会になってから北側を切り崩して道路を付けたもので、今では大型バスも通れるようになっていきます。



愛媛の太山寺二王門。右が北の道路

さて、門は八脚門で柱も太くどっしりとした和様の構えを見せていますが、足元と柱頭には粽を持ち、礎盤に乗せるなど禅宗様の手法も取り入れた折衷様となっています。

ます。

しかし、屋根を見ると少しアンバランスのような気がしてなりません。建物や柱の大きさに比べて屋根が小さいのです。軒の出も少なく、何かとってつけたような気さえます。

それもそのはず、創建時には楼門（2階建てで、1階は屋根ではなく廻り縁が付く）であったものを、後世単層に改修した時に葺かれた屋根だからです。軒裏をよく見てみると、正規の二手先の組み物ではなく、廻り縁の縁桁や縁板であったことがわかります。

私が最初に兵庫の太山寺を訪れた時に驚いたのですが、こちらの二王門（国の重要文化財）も同じようなバランスの単層の門でした。調べてみると、同じく2階建のものを改修して現在に至ったとのことでした。ただしこちらは楼門ではなく、二重門（1階にも屋根が付く）だったそうです。



兵庫の太山寺二王門

宗派も違い距離も離れてはいますが、このように本堂と二王門に共通点を持つ二つの「太山寺」、距離と時代を越えた何らかの交流があったのではないかと想像の翼を広げている今日この頃であります。

## 山田竹材（その四）

山田竹材 山田 清昭

平成の大合併から10年となった。愛媛県の自治体が20の市町村に減ってしまったが、かつては70もの市町村があり、しかも現在0になってしまった「村」が実に14もあった。つまり愛媛県の5分の1の自治体が「村」だったのである。

さて、その70あった市町村だが、当時私は一カ所だけ足を踏み入れることの叶わなかった自治体があった。（未だにだが…）。

そこは、越智郡魚島村（現上島町）である。じゃあ、生名や岩城や弓削、それに関前は…？と突っ込まれそうだが、それらの地は実は何度も踏み入っているのだ。

西条の河口周辺で秋から冬にかけて現在でもみられる海苔養殖は、かつて瀬戸内海の主要な漁業の一つであった。昭和30～40年代には500件にも上る生産者が農閑期の生業としていた。島嶼部の漁民もこぞって海苔養殖業に介入し、漁業の多角化を図っていた。（魚島では海苔養殖業の試みがなかったようだ。）

そして、その養殖に欠かせないものが「竹杭」であった。浅瀬に竹を打ち、それに網を掛けるのである。

私が高校生の頃は、竹杭用に一万本の注文が入り、竹の伐り時期がよくなる8月から納期の9月中旬までの間、酷暑の中の辛い作業に当たっていた。因みに、一日に伐り出せる規格の竹は、一人せいぜい多くて100本くらいで、悪天候の日には作業が出来ず、多くの従事者を要し、山林で賄えぬときは、肱川河川敷の竹林を伐採して納期に間に合わせていた。

島嶼部への運搬は、今治港から小さなフェリーに乗船し、注文主の待つ港へと向かうのである。

大島～伯方島～岩城島～佐島～生名島～弓削島～県境越えて因島～向島～そして本土の尾道。

今じゃ、しまなみ海道を軽快に走り、ドライブ気分だろうが、乗船のフェリーは各寄港でかなりの時間を要し、目的地到着となる。

積み荷の竹を下ろし納品を済ませると、次の船便で急いで帰り、また次の納品へと竹林に向かった。

海水と淡水の融合を好む海苔は、島嶼部では不向きであり、品質の低下と相場の下落に伴い、同50年代末には島の全業者が海苔養殖から撤退してしまった。

現在、西条市禎端や壬生川にわずか10件程の業者が生産を続けているが、竹杭に代わる塩ビやグラスファイバー素材が登場し始めると、竹の注文が激減してしまう。

そんな中、今でも加茂川と中山川河口に辛うじて立つ竹杭は、全てが山田竹材の竹なのである。



手箕編みに従事する母（山田ヒデ子）と従業員昭和45年（1970）

## DNA

松山支部 新多 賢一

ある建築家が「日本の景気が悪くても、世界のどこかには景気がいいところがある」と言っていた。視界は、意識すれば広がりには限界が無い。左官の手で仕上げられた壁。その壁として形作られるまでに、材料の準備や養生、乾燥のための「時間」、その材料や塗るための道具を選ぶ目と知識、どう乾燥していくかを見極める「経験」、そして左官という仕事が、古来から受け継がれてきた「歴史」という背景が隠れている。壁を仕上げる工程は、左官仕事のごく一部である。目の前に見えるきれいに仕上げられた表面までに、膨大な背景が隠れている。

一昔前まで、大工さんが築いた構造に、竹木舞を搔いて、近くにある土を庭先でじっくり寝かして発酵した粘りある泥を、左官をはじめ、一家総出では事足りず、その地域の住民の手伝いもあり、塗り付ける風景があった。泥は、ワラと土をみんなが足で踏みほぐして掻き混ぜて、約1年寝かす。じきに発酵してくるので、臭い。そして、泥が塗られた壁は長く乾燥させて、いくつかの工程を経て、漆喰を塗り付けていく。その漆喰も、消石灰・スサ・のりを現場で混ぜ合わせ、仕上げられる。使う材料は、ほとんどが地域で調達できていた。しかし、よくあったこの風景も、現在では、あまり見られることはない。ただ、間違いなく残っているのは、左官という人と仕事である。



(漆喰作成のワークショップ)

左官仕事ほど、機械化が進まず、かつ永い歴史を持つものがあるだろうか。手仕事に目を奪われ、心を打つのは、その永い歴史により、日本人のDNAに深く刷り込まれているからではないか。木材の木組や、建具の細かい造りと、左官の仕上げた壁が身近なところにある時代を、現代の私たちが想像する以上に長い時間、日本人は

過ごしてきている。それら手仕事の空間を、受け継ぐのは、至極当然なのかもしれない。

一方で、様々な素材や仕上げ方が、建築に取り入れられているのも、事実である。手仕事の空間に身を置くことが減ってきたわずかな時の間に、急速な技術革新の波に、建築は覆われた。人間が人間である以上、より便利にしていく風潮は止められない。我々も、技術革新の恩恵を受けているのも、また事実である。



(ダイナミックな仕上げ方)

あるカリスマ左官が、ニューヨークで壁の仕上げを額に入れた作品の個展を開いた。「伝統、文化、職人技、日本」という概念が張り付くとそれに惹かれる人たちだけが集まり、リアルな評価を聞けないと考え、アートのひとつとして表現した。その結果、ニューヨーカーからは、アートでもクラフトでもない。新しい“ネイチャー”という感覚が、大方を占めたようだ。それらの作品は、土などの自然素材をそのまま活かしながら作ったもので、自然の利点欠点が共存しているものだった。カリスマ左官は、ニューヨーカーが評価した“ネイチャー”とは、数値に置き換えられない、人の心に響くもの、まさに本質的な自然観だったのではないかと、自己分析していた。

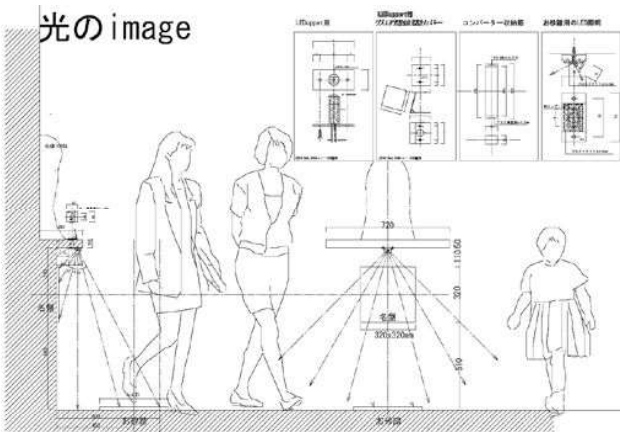
建築の内外部を、全て左官仕上げにすることで、圧倒的に左官仕事を訴えることができる。しかし、様々な素材や仕上げが存在する今の世の中、それを実現するのは至難の業である。左官仕事をいかに次世代に繋いでいくかは、提案の在り方に委ねられる。一部屋だけ、一壁だけ、もしくは額に入った左官仕上げを取り入れるだけでも、継承の一助になると考える。左官仕上げの壁を身近に置き、手作りの奥深さを感じる目や手、心を通じて、私達のDNAに刷り込まれた感覚を、呼び起こしてほしいと願う。

# 四国別格霊場第4番札所 鯖大師本坊の照明

宮地電機株式会社 田部 泉

愛媛から車で約5時間の距離にある徳島県海部郡海陽町浅川に四国別格霊場第4番札所の鯖大師本坊があります。鯖を三年絶ってご祈念すると願いごとがかない、病気がなおり、幸福になれるといつしか人々に、「鯖大師」と呼ばれるようになった霊場である。堂東の山腹をくり抜いてつくられた大洞窟があります。全長約88メートルの大洞窟の左手側面には四国八十八カ所霊場と四国別格二十霊場の108体の仏像が祭られています。この108体の仏像に個々に仏像の下部から上向きにアップ照明（小型LED 消費電力0.5W 色温度3,000K）で照らしています。

## ■大洞窟の照明



また、仏像の足元の地面にはその土地の土を集めた四国霊場お砂踏修行道場となっているので、同じ光源のLED照明を足元に個別に設置して安全に進めるお祈りできるように照らしています。

また、右手側面には不動尊奉安殿のショーケース内も同じ光源の小型LED照明スポットで照らして大洞窟は明るすぎない神秘的な雰囲気がある。

## ■大洞窟の仏像照明



この大洞窟の奥には護摩堂があり、全国の信者様御祈願大不動名王像多数祭られています。この御祈願大不動名王像を手前下よりLEDライン照明（消費電力2W/m、色温度3,000k）で全体的に照らして薄暗い中でも大不動名王像をより金色に魅せ煌びやかさを増す効果があり、より神秘的な世界を創っている。

## ■108体の仏像写真





## 第六回 居心地

松山支部 東 優

『居心地』は、目には見えません。居心地をいかに上手に作っていくか……。家具の位置関係は、人の動線、部屋の大きさや形と影響しながら、ほっこりした『たまり』や暮らしの重心を作っていきます。

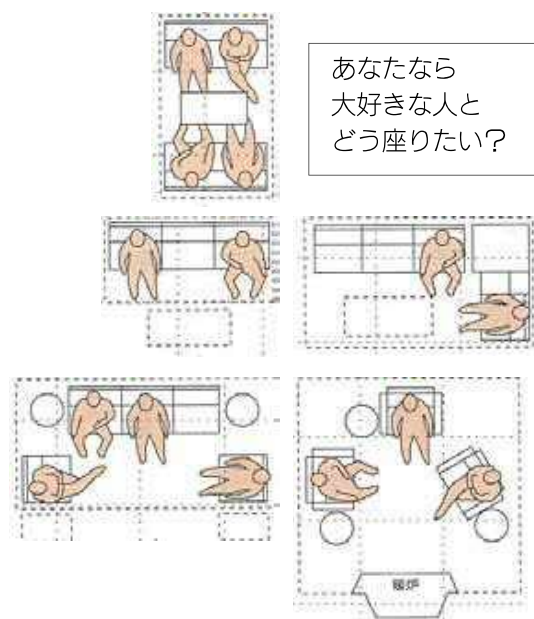
私たちの暮らしは家具や道具によって豊かに便利になります。でも量より質、それに加えて使い方。家具を置くことで部屋が狭苦しくなるようでは台無しなのです。

例えば椅子。小さめだけれど部屋のバランスにちょうど良い寸法だったとします。でもそれが、その部屋には大きすぎて、どっしり立派な椅子に代わってしまったらどうか？部屋を狭く感じる、どうも調子悪いなと思ったりする……。立派な大きな椅子が、必ずしも良いとはならないのです。ものの美しさは、空間との取り合わせによって変わります。いい位置に置いてあげて、その美しさをひきだしてあげることも『しつらひ』の大切なところだと思います。

暮らしに必要な『モノ』を納める家具は、箱や壁となって部屋を仕切ったり、空間を構成したりします。建築構造の壁、その中の収納の壁、その中にちりばめられた家具。その点在する家具をどう配置するか、暮らす人の動線空間と家具のある滞留空間とが混ざり合い、いろいろな時間が賑わいを生みます。家具配置が、全体の空間を支配し、人の居心地をつくっていくのです。



例えば人とどう座るか？配置によって、どんな会話になるかが決まっていったりします。緊張する面接の真向かい配置、少しスムーズな会話重視のL字配置、一緒に暖炉を見つめるもっと濃厚コの字配置、映画鑑賞の一直線配置……



いろいろ家具を動かして見て、そのたびに空間の動きが変わるのを感じた経験は、どなたも少なからずあるでしょう。あれこれやっているうちに、良い居心地に行きつく、その過程も暮らす楽しみなのかもしれません。折り畳める椅子や小さなテーブルは居心地探りを自由にします。

住まいと家具の融和、ヴィンテージの古い家具と新しい家具の美しい調和、思い出の家具や調度品との対話、環境としての在り方、家具単体としての在り方、考えるべきことはてんこ盛り。

暮らしを見据え、ひとつの家具を選ぶこと……。それには、住まいの空間設計と同じく、居心地を作っていく視点が大切だと思います。

# 目にみえない心地よさ

今治支部 橋詰 飛香

大工さん達のしっかりとした技術が100年200年と安心できる住まいを造っていくためには欠かせない事をお話しました。しかし大工職人だけでは良い家は出来ません。住まいには『土』があってこそ安らぎの場が生まれ、家として落ち着きます。土壁が放つ空気は、まさに現代の家が失ってしまうおもうとしている空気感ではないでしょうか。

土の心地よさは、母なる大地の心地よさそのものです。『調湿性』などとよく使われる安っぽい言葉では到底説明のしようがない世界が存在しているといつも感じますが、まだ十分に科学では解明されていないようです。私はこの土壁から温かく優しい柔らかくに包み込むようなエネルギーを感じるのです。まさにお母さんの懐に抱かれるような感覚・・・と言ったほうがピッタリときます。本当に心から癒されるような絶対的な安心感と心地よさなのです。私達が生きていくための植物や生き物を育てているのが大地でもあります。その生きとし生けるものを育む土のエネルギーは、母性のエネルギーそのものなのだと感じます。『母なる大地』という言葉があるのはきっとそのせいかも。



(硬い壁のはずなのに、ふわっと柔らかく優しい土の壁)

面白いことに、力強い木組みには雄々しい男性のエネルギーを感じ取ることができます。だから家の中心で四方の梁を支え家族の安全を守る大黒柱は父親（男性）に象徴されます。男性が家の軸になって、女性がそれを柔らかくフォローしていく。この男と女、力強さと柔らかさといった陰陽の二極のエネルギーが一つとなって家は成り立ち、心身共に安心できる住まいを形づくっているのです。家に男ばかりがいても息苦しくなるように、そ

こに女性の柔らかく優しい朗らかな空気感があってこそ心地よさが生まれ、長く住むに耐えうる家になっていく・・・。

果たして先人たちがそれを意図して家をつくっていたのかは不確かで私の勝手な想像の世界かもしれません。今を生きる私達よりずっとはるかに五感や感性に優れていたのは確かで、目に見えるもの以上に空気感や自然の素材たちが放つエネルギーを感じ取り、大切にしていたのが日本の家であったと私は推測するのです。木や土以外にも竹や草や石など個々の空気感（エネルギー）がエッセンスのように加わりさらに心地よい住まいを形成していくこととなります。それが日本の家です。

私自身も・・・昔ながらの家づくりを手掛けはじめて、今までに感じることのなかった感覚や感性が少しずつ開かれていくのを感じます。ここでは割愛しますが、設計者としての私もそうであるのなら、この住まいに四六時中身を置くことになる家主は、この家でさらに感覚や感性の変化を感じるのではないのでしょうか。

現代の住まいが機能重視・性能重視ななか、人が知性と感性をもった生き物として暮らす住まいに真に求められるものは何なのか・・・その道に携わる者として考えるべき課題です。時には今ある固定概念をはずし常識を疑い、目に見えない世界にちょっと足を踏み入れるのも良いかもしれません。

素材が放つ空気感は言葉では伝えきれません。経験して自分の肌で感じてこそ知ることができるし感じる事ができます。しかし既製品ばかりを扱っていたのでは縁のない世界。自然の素材がもつ心地よさや感覚の世界から遠のいていっているのが今の時代です。

土のワークショップをすると、土を見て「キタナイ」という子供がいて土を触ろうとしません。いつの時代か土壁を見た時に「キタナイ」と言われる日が来るのだろうか・・・そんな日本は一体どんな社会になっているのかと心が痛みます。頭ばかりが大きくなって、感じる事を無くしていったのではないだろうか・・・。

せめて住まいを生み出す設計者にはそうではないことを願うばかりです。

# 松山建築楽会

松山支部 玉乃井公和

年を取れば、過去の記憶は余程インパクトのあった出来事以外は、忘れてしまったり、覚えていたとしても結構曖昧であったりすることがよくあります。特に時間の経過については、その誤差が思っていたよりも大きくあったりします。

あれはもうずっと、私が30歳過ぎの頃の出来事だとばかり思っていたら、事務所の片付けの際にひょっこり出てきた“記録”によれば、その日付には「平成3年3月30日現在の会員名簿」と書かれてありますから、それは今から24年ちょっと前のことであったことが分かります。私が40歳前の頃のこと、その記憶には10年近くの誤差がありました。

「松山建築楽会」のことです。と言っても知っている人は少ないかも知れません。当時、どういったかたちで皆がまとまって行ったのかは忘れましたが、主に若手の建築設計をしている人達が集まって作った会でした。

発起人は13名。発足当時の会員は、どういう訳か幹事をしていて私の手書きの名簿を数えてみれば、発起人も含めて50名以上でした。(会費は確か月500円くらいではなかったか。)

この「松山建築楽会」という名前の名付け親は、発起人の一人でもありました渡部佐紀男氏で、まことに当を得たうまいネーミングでした。

「松山建築楽会」が発足してどのような活動していたのかは、もう殆んど忘れてしまいましたが、一つだけ今でも覚えているのは、発足してすぐに建築家、西澤文隆先生の優れたお仕事であります、古建築と庭を実測された、その原図の展示会をラフォーレ原宿で開催したことでした。

今思えばあれは、時代の熱気に促された流れの中で、あの時にしか起こり得なかった一場の風景のようにも思えます。

その後の活動が、どのようなことをして、どのくらいの期間当初のメンバーで続いたのかは、全く記憶にありませんが、当時、未熟なりにも何かを求めようとする人達が集まり、そこでそれぞれに思っていることを語り合い、そこから刺激を受けたりする場があったことは、私にとっては貴重なひとときであったようにも思えます。

こんなことを言うと、他のメンバーだった人達にはお叱りを受けるかも知れませんが、今の私から見た当時の建築家の卵たちの様は、例えて言えば、出始めてしばらく経った稲穂のようなものではなかったかと思います。

そしてその熱気が自然に冷め、ひとときの縁もほぐれて、私は井の中の蛙になり、狭い井戸の中から円い小さな天空を見上げては、その深さを見つめるしかない道に入る訳ですが、厄年の頃にある閃きのようなものがあって、狸に化かされたかのようにして“人が変わった”ことを思えば、それがあの「松山建築楽会」発足からわずかに二、三年後のことであることからすれば、そのことも、一つの“必然”として私に“用意”されていたもののようにも思えてきたりします。もちろん、ちょっとばかり自分勝手に描くロマンチックな物語として。

「松山建築楽会」、今もまだ活動しているのでしょうか。



# 青年・女性委員会 中四国ブロック大会（尾道）報告

女性委員会委員長 大塚美由紀

開催日 6月13（土）～14日（日）  
場所 広島県尾道市 しまなみ交流館他  
大会テーマ 「伝」人から人 町から町 過去から未来～文化の遺伝子～

愛媛からは青年17名、女性3名で広島大会に参加してきました。

今年の地域実践活動報告会は、例年行っている各県での日頃の地域実践活動の取り組みの報告か、大会テーマ「伝」に基づき今後各県の建築士会で地域実践活動を通して何を伝えていくのかという考察。いずれかの内容での報告となっていました。

徳島県からは「こども神輿による木のよさの伝承」

高知県からは「仕事が地域実践活動～建築士として設計・監理で地域貢献～」

岡山県からは「建築セミナー with GAKUSEI」

鳥取県からは「米子の町家・町並み保存再生プロジェクト～伝承を実証～」

山口県からは「関門地区景観ウォッチング&セミナー～行政区分を超えて継承する活動～」

香川県からは「街角遺産～ the local heritage ～」

島根県からは「避難所 HUG による避難所計画」

広島県からは「語り継ぐ まちの記憶」

地域実践活動は、共通する課題や発想から始まった活動であっても、その地域や参加する人によってそれぞれ違った形で育っていくものだと、今回の発表を聞いて感じました。

愛媛県からは「とびだせ建築士から伝える」の報告があり、坊っちゃんの衣装で登場した発表者の西森さんは、原稿も持たずに発表を始め、テレビでみる「スーパーレゼン」並みに参加者に語りかけるような発表態度で、会場全体を一時にして取り込んでしまった感じがしました。その後の審査で愛媛県が優秀賞を頂き、中四国ブロックの代表として10月の「全国建築士フォーラム in 石川」で発表する事になりました。

基調講演では「おのみちで伝える」をテーマに尾道大学の教授とまちづくり研究会代表の二人が、まるで世間話をしているように尾道の様々な話を淡々としていまし



た。その自然な感じから尾道への愛情が淡々と伝わってきました。

大会会場では「まちづくり活動パネル展」も開催されました。建築士会以外の一般団体からの展示で、NPO団体、まちづくりの会、工業高校、高等専門学校、建築系大学などの様々な取り組みについて知る事ができました。このパネル展示は大会前の6月7日から大会終了後の6月20日まで開催していたようで、建築士会のみならず、建築やまちづくりについて一般の方知ってもらえる良い機会になったのではないかと思います。

二日目のフィールドワークは「歩いて さがそう 未来の おのみち」地図を片手に、昔ながらの風景と新しい風景。きつい坂道とやさしい海のおい。様々な事を感じながら尾道の町を散策しました。

この「歩いてさがそう未来の～」は広島県建築士会青年部・女性部が6年間、毎年県内各地域で「その町の過去を学び、現在を知り、得た知識で未来を考える」という主旨で子供達と町を歩いている事業です。

来年は岡山県での開催です。大会テーマは「伝統の継承」です。またたくさんの青年・女性会員の方に参加して頂きたいと思います。



松山支部 生熊有子

初日の地域実践活動報告会では、愛媛県代表の西森さんが素晴らしかった。まずは、坊っちゃんの格好で皆の心をつかみ、次は「とびだせ建築士」の報告内容で皆の心をわしづかみ。とびだせ建築士に参加した高校生が大人になり建築士会に入会したエピソードが、審査員の支持を得たと思います。その結果は、みごと第1位！おめでとうございます。そしてお疲れ様でした。

その他、個人的に高知県の「建築士として設計・監理で地域貢献」という、地元の風土・特産を活かして地元らしさを追求した建築活動報告が、良かったです。

# かつての「尾道三部作」の街、 尾道にて

松山支部 河合優志

尾道出身の映画監督・大林直彦氏が、故郷を舞台にメガホンを撮った「転校生」「時をかける少女」「さびしんぼう」いわゆる尾道三部作です。高校時代、多感な少年だった私は、特に「さびしんぼう」に大いに感動し、高校三年生の夏休みに、アルバイトで貯めた御小遣いで、泊りがけで尾道の映画のロケ地巡りをしました。

当時、尾道市役所の観光課でロケ地マップが貰えてレンタル自転車で坂道を汗だくで走り廻った懐かしい思い出があります。

映画「さびしんぼう」の冒頭のシーンで主役の井上ヒロキ（尾美としのり）の「尾道の風景だ、初めて観る人でも何故か懐かしいと言う」というセリフがあります。かつて確かに尾道の街はどこまでも垢抜けない泥臭い街で、それがこの街の最大の魅力だったような気がします。

映画で撮影されたロケ地は実際に訪れてみると、何の変哲もない何処にでもありそうな場所で、「さびしんぼう」の主人公「井上ヒロキ」が、あこがれの「橘百合子（さびしんぼう）：富田靖子！」を追っかけて走っていた漁港も老朽化された雁木が敷き詰められた、まるで私の地元の伊予港とたいして変わらないような小汚い！海岸線だったりののですが、そんな場所がプロのカメラのファインダーを通すと、あんなにも叙情的に映るのかと妙に感心したものでした。

それから約四半世紀が経過、再開された駅周辺は当時の面影を微塵も感じさせない、良く言えば洗練された、逆の言い方をすれば全国に何処にでもある画一的な風景となってしまいました。「転校生」で駅前にあった主人公「斉藤一夫：尾美としのり」の家（母親役の樹木希林さんが不機嫌そうにいつも玄関先で打ち水をしていたシーンが印象的です）も跡形もなく解体され、すぐ傍の海岸線は綺麗に護岸整備がされています。

駅の裏側には、この街に全く馴染まない分譲マンションが数棟林立し、巨大ショッピングモールが鎮座。

しかも、そのマンションのデベロップメントをしたのがかつて私が独立前に勤めていた高松のA工務店！？

苦虫を潰すような気持ちで見てしまいます、この街にだけは、こんなマンションは建築してほしくなかったですね。まるで自分の青春の思い出を全否定されたような気持ちで、しまなみ海道で本州に渡る際も最近では、尾道の街は殆どスルーしていました。

そして、今回の中四国ブロック大会、高校の先輩でもある相原さんのお誘いで参加させていただきました。結

論から申しますと、今回のブロック大会は大変楽しい良い思い出となりました、時節柄、梅雨の季節なので雨に降られたら嫌だな～と心配していたのですが、事前の降水確率の高かった天気予報も外れ天候にも恵まれました。

何よりも一番の収穫は、尾道の街を私はこの数年間誤解していた事に気が付いた事です。確かに、平地エリアの風景は様変わりしてしまいましたが、JR山陽本線の線路より北側のエリア、特に車が進入出来ない坂道だらけのエリアは、四半世紀前と何ら変わらないディープ？な雰囲気は今でも醸し出していることに、何だか安堵してしまいました。今でも坂道だらけの路地裏のどこかに、映画の登場人物が行んでいそうな錯覚にとらわれました。

ですが、それが地元で暮らす人々にとって良い事かどうかは分かりません。もしかしたら他所者・観光客の工ゴなのかもしれませんが。

広島支部の方の説明では、接道等の理由で基準法的に建て替えが事実上不可能な敷地が多い事、そして何よりも物理的に施工が絶望的な立地が多く（工事車両が進入できなく、資材等の搬入が人海戦術になる）施工者が工事を嫌がる為、昔のままの建物が残ってしまっているとの事。ですが、そんなネガティブな状況を逆手に取って古民家を改修して国の登録有形文化財に登録し、有効活用を試みている有志の方々の姿には、ひたすら頭が下がる思いです。このあたりの取り組みは、例えば松山の三津あたりにも参考になるな～と感じました。（既に多くの有志の方が取り組んでいらっしゃると思いますが。）そして、私の地元の伊予市の灘町あたりの古民家などにも・・・。

私の個人的な感傷はこのあたりにして、(株)愛媛建築住宅センターの西森さん「坊っちゃん」お疲れ様でした！夜の懇親会でも、県外の支部の方に褒められ自分が何か成し遂げた訳でも無いのに、何だか鼻が高くなってしまいました。次の石川での全国大会では、マドンナ同伴でいかがでしょうか？「坊っちゃん」が優勝してくださったおかげで愛媛メンバーだけで繰り出した二次会も盛り上がり、青年部の皆様との距離がぐっと近くなった気がします。

今回参加された皆様、お疲れ様でした、そして有難うございました。

# 旧武蔵修理工事見学会報告

女性委員会副委員長 下元 美恵

開催日 平成27年6月6日(土)  
場所 西予市宇和町 伝統的建造物保存地区  
参加者 29名

去る6月6日女性委員会主催にて、西予市指定伝統的建造物の修理事業の見学会と中町散策を行いました。お天気の心配もなく、沢山の方に集って頂き、当事業の設計・監理者である酒井純孝さんに説明をして頂きながら、夕方まで、大変有意義な時間を過ごさせて頂きました。



見学のメインである旧武蔵は、江戸時代後期に建てられた木造2階建、入母屋造り妻入りの建物です。改修後は、かまど炊飯や洗濯板を利用した洗濯、など昔の暮らしを体験できる西予市所有の施設として生まれ変わります。



主屋は限界耐力計算を行い、木造仕口部分に耐震リングを活用するという、愛媛県でも伝統構法建造物の先駆的な耐震の考え方をういた改修工事であると説明して頂きました。

主要な構造材は、利用できた古い材料と新しい材料を使用、新しい材料には平成の大修理だとわかるよう焼き鏝で印が付いておりました。後生に残る印に、責任の重さとロマンを感じたのは私だけでしょうか？



2時間ほどたっぷり説明して頂き、その後は、少し前に修理工事の終わった鳥居門の見学と中町散策を行い解散といたしました。

建築士会でこの地域に来て頂いたのは、今回で3回目を迎えます。その都度、「卯之町伝統的建造物群保存地区」を知って頂き、地域が変わっていく姿をご紹介でき、まだまだ生まれたばかりの重伝建地区ですが、大切な建物が生まれ変わって、後生に受け継がれていくことに、うれしさを感じる事の出来る時間でした。

最後になりましたが、今回の見学に工事現場をお休みしてご協力頂いた工務店様、長時間にわたり細かく丁寧に解説をしてくださった酒井さん、大変ありがとうございました。

# 建築巡礼 in 松山Ⅶに参加して

松山支部 和田 崇

去る7/11、今年で7回目を迎えた建築巡礼 in 松山に参加しました。

建築巡礼 in 松山は、松山市近郊の近代建築・古建築を一般参加者と一緒に訪ねる催しです。7/1の建築士の日に合わせて開催し、建築士(会)の社会へのPRと自分自身の建築士としての意識を再確認するという目的があります。

毎年、花岡副支部長を中心に巡礼先を選定し、若手スタッフが参加者への解説役をつとめ

ます。今年の巡礼先は松山市北部～今治方面。午前中にミウラート・ヴィレッジ、国津比古命神社楼門、南光坊大師堂を廻り、昼食後は今治市役所・市民会館・公会堂の丹下建築と今治城を訪ねました。

私はミウラート・ヴィレッジの説明を担当。久しぶりの訪問でしたので、事前勉強会で1回、翌週にさらにもう1回と本番までに2回美術館に行っておさらいをしました。長谷川逸子さんのことも少し勉強する機会となり、長谷川さんと古谷誠章さんの対談などを読み返し、あらためて偉大な建築家の一人であることを認識しました。

私以外の各建物の解説者は非常に豪華です。近藤岳志さん、峰岡秀和さん、久保孝さん、大西慶さん、住宅センターの井上社長&和泉部長、大塚美由紀さんという松山支部青年・女性委員会の中心メンバーが各建物の解説

を行いました。

その中でも近藤さんの「紙芝居」方式の解説はとてわかりやすく、また今治公会堂での井上さんの舞台上からの解説がとて格好良かったです！

各巡礼先まではバスでの移動でしたが、相原昌彦さんほかスタッフと参加者の方の会話も弾んでおり、建築士・建築士会のPRになったのではないかと思います。

私は参加出来ませんでしたが、当日は松山支部恒例のビアガーデンがあり、賑やかな打ち上げになったことと思います。この建築巡礼は、支部の青年女性スタッフにとって、普段身近にありながら深く学ぶことの少ない建築について勉強できるとても良い機会になっています。

個人的には来年度以降も是非継続してもらいたい事業ですが、今年度の一般参加者はほとんどが65歳以上の方ということでしたので、参加者の負担を少なくする巡礼経路の作成や暑さ対策等しっかり考えておくことも大切だと思います。

企画立案にはじまり各方面への折衝・資料の用意など、赤根支部長はじめさまざまな方のご尽力により今年の巡礼も大成功でした。私も微力ながら今後もお手伝いをさせてもらいたいと思っております。みなさまお疲れ様でした！



国津比古命神社楼門



今治城

# 建築士による 木造住宅倒壊模型製作

この度、南地区・東地区有志による木造住宅倒壊模型が完成いたしました。その経緯・今後の活動予定についてご紹介いたします。



(補強をしていない状態の木造住宅倒壊模型)

## 倒壊模型製作の目的

将来、発生が懸念されている東南海・南海地震による建築物の被害を最小限にとどめるため、特に木造住宅の耐震化が急がれています。愛媛県や松山市で、耐震化による補助金が設けられていますが、県民・市民に十分な広報が出来ていないのが現状だと思います。

そこで、木造住宅の耐震化の必要性を感じてもらうため、木造住宅倒壊模型を製作し、愛媛県建築士会松山支部南地区・東地区等の「地区」単位で防災・耐震講習会を行い、耐震補強の有効性について地区住民に理解して頂き、最終的には木造住宅の耐震改修工事につなげていくことを目的としました。

また、他団体等に倒壊模型を貸し出し、より多くの方に耐震性の重要性を知ってもらうことも目指しました。

## 倒壊模型の特徴

一般的な木造在来工法の住宅をイメージした1/10スケールの二階建て木造軸組模型で、筋交いや耐力壁の有無による揺れ方の違いを体験・体感できるものです。  
※ 補強の有無の違いを感じて頂くための模型ですので、接続部は実際の在来工法とは異なります

模型製作者：小原文子（南地区地区長）、西浦郁子、三好欣尚、藤原昌訓、永井由起、永井一生（一般参加）、近藤岳志、渡邊道彦（東地区地区長）

## 倒壊模型の製作経緯

平成26年6月21日に南地区役員会で防災講座の資料作成・倒壊模型製作の提案があり、その後、ダイキ美沢店にて倒壊模型実物の確認を行いました。

## 松山支部 松山支部南地区・東地区有志

平成26年10月3日に(株)近藤木工所事務所にて倒壊模型製作に向けて打合せを行い、南地区・東地区合計7名の方にご参加頂きました。

その後、模型作成用図面作成を西浦郁子さんと渡邊道彦さんが担当して頂き、図面が完成しました。



(模型製作用図面を原寸出力)

平成27年5月11日(株)近藤木工所工場（以後、同場所）にて20mm角の部材（スプルー）を加工し、必要な材料を用意し、5月14日に事務所・工場にて部材墨付け、穴開け作業を行いました。



(部材の墨付け、部材名付け作業)



(部材穴開け加工の様子)



5月27日マグネット取付用穴開け加工を行ったあと、部材穴開け、マグネット取付作業を行いました。



(部材にマグネット装着の様子)

6月2日に追加でマグネット取付用穴開け加工を行い、6月3日に残りのマグネット取付・部材接続・部材名称貼付作業を行いました。



(部材の接合・部材名称貼付作業の様子)

6月10日に基礎・屋根・キャスト取付・加振棒作成を行い、筋交いや耐震パネル、火打ち梁等にマジック



(完成後の倒壊模型を揺らして実験している様子)

テープを貼り、部材接合の為、ゴム通し作業を行い、ほぼ完成いたしました。

7月4日は、北斗七星にて南地区総会・懇親会（東地区合同）（27名参加）にて倒壊模型お披露目を行い、参加者のみなさんから、いろんなご意見を頂くことができました。



(倒壊模型お披露目の様子。補強なしと補強ありで加振)



(南地区総会・懇親会（東地区合同）の様子。27名参加)

### 今後の課題

地区への防災・耐震講習会を行う前に、部材を接合しているゴム紐を固定する作業を行う予定です。また、屋根を重いパターンと軽いパターンで違いが出せるような部材作成や、貫構造、特殊な繊維による耐震補強等、他の補強方法も提案できる部材作成も検討中です。

また、模型内部に家具等を配置し、地震時の家具の倒れ方の違いを知ってもらうことも検討しています。

今後、必要に応じて2号機の製作も視野に入れております。

この模型は、貸し出し可能ですので、ご希望の方は是非南地区へお問い合わせ下さい。

最後に、この木造住宅倒壊模型の作業にご協力頂いたみなさま、ありがとうございました。

# 人生を豊かにしてくれる建築士会

松山支部 近藤 岳志

松山支部の赤松さんから「けんちくの輪」のバトンタッチをいたしました松山支部の近藤です。

今回は、私の建築士会活動について少しご紹介させて頂ければと思います。



近藤岳志です。

島根の山田隆さんとフラダンス中

## 建築士会入会のきっかけ

私が建築士会に入会したのは、4年前です。

建築士会の存在を知ったのは、建築士の受験申し込みで、建築士会館の1階廊下に貼られた松山支部の建築巡礼のポスターを見たのがきっかけでした。建築士が一般市民に対して、建築を通じた地域貢献のイベントはとても素晴らしいと感じ、合格したら入会しようと思っていました。

その後、建築士試験の合格者を対象にした「新規登録者セミナー」というお知らせが届きました。参加すると、当時松山支部の青年委員長だった松本一師さんが声をかけてくれて、士会活動についていろいろと教えて頂きました。一番印象に残っている言葉は、「安く旅行に行ける!」という事でした(笑)。そんな甘い言葉?に乗せられ、入会したというわけです。

## いろんな活動を通して増えていく仲間

入会後は、可能な限りいろんな活動に参加させて頂きました。中四国ブロック愛媛大会で愛媛県内の方とつながり、西瀬戸交流会で原田聖将さんと出会い、中四国若手建築志(士)交流会、全国大会等と、全国の建築士の仲間があつという間に増えました。今ではお互いの活動をフェイスブック等のSNSを通じて常に拝見しているような状態です。

振り返ってみると、福岡で勤めていた設計事務所を退職し、地元松山に戻って、誰も知り合いがない状態から、士会入会后4年間でよくこんなに仲間が増えたなあと思うばかりです。

## 文化財・まちづくり委員会

私は松山工業建築科卒で、当時犬伏先生が建築科の課

長でした。犬伏先生は授業の余談で古民家調査のお話をよくされていました。先生のご厚意で、休日に古民家の現地調査に同行させて頂いたこともありました。士会に入会した後、犬伏先生が文化財・まちづくり委員会にいらっしゃると聞いて、私も委員会に参加させて頂くことになりました(現在は退会)。今では、花岡委員長を中心にお寺や神社の調査・実測・見学会等のお手伝いをしています。家業の(株)近藤木工所の方でも委員会に関わった物件などで社寺仏閣の木製建具の製作、修理等でお世話になっております。

## 松山支部南地区の活動について

建築士会に入って、松山支部の中にさらに地区があることを教えて頂きました。所属している南地区の総会・懇親会に初めて行った時から、何かとお役がまわってきて、今ではいろんな行事の準備係として活動しています。

詳細は別のページでご紹介していますが、南地区・東地区合同で木造住宅倒壊模型の製作をいたしました。毎週7~8人が(株)近藤木工所の工場に集まり、模型を作成いたしました。今後は、倒壊模型を利用し、地区の住民の方を対象に、防災・耐震講習会を行い、木造住宅の耐震化の有効性について周知していく予定です。



南地区総会・懇親会(東地区合同)の様子(27名参加)

南地区・東地区合同で製作した木造重多雨倒壊模型

## 今後の建築士会活動について

少子高齢化、建築を取り巻く環境の変化により、年々建築士試験の受験者、合格者数が減っています。建築士会を若い世代から盛り上げるためには、子どもの頃から建築に興味を持ってもらえるよう、中学生や高校生対象にした講演会やイベントの開催や、建築士を増やすための資格合格につながるイベント開催等必要ではないかと感じています。微力ですが、私自身の人生を豊かにする為にも、今後も可能な限りお手伝い出来ればと思います。

次のバトンは、南地区でいつもお世話になっております永井由起さんをお願いします!

# きっかけ

松山支部 長岡 康広

広島工業大学の同期生・・・宇和島支部の酒井久和さんより指名を受けました松山支部の長岡です。総会の時に同期のよしみと安請け合いたしたことを今になって若干後悔しております。これは前厄の災いだらうか・・・

初めに、私が建築に携わるきっかけをお話しします。現在の私のことをご存知の方は、就くべくして就いた職業だと思われるでしょうが、高校進学当時は、実は、医者になりたいと思っていました。ただ、私の能力では無理だと早々に気づき1年で諦め、その後、進路相談室の資料の中から、社会開発工学に興味を湧き、国立大を目指すも受験に失敗、広島工業大学へ入学。大学では悪友に恵まれ、大学の勉強よりも社会の勉強に力を注ぎ、卒業と同時にゼネコンに就職し、現場監督として歩むことになりました。

現場監督として歩み始めた最初の3年間は本当に地獄でした。寮に帰るのが夜中の2時3時になるのが当たり前、休みが無いのは当たり前、ひどい年は1年間の休みが、お盆の1日と正月三が日の4日間しかない年もありました。寒気の厳しい時期に夜な夜な夜中の0時から現場の墨出しを行ったことを今でも覚えています。そんな職場でしたから、入社当時30人以上いた同期は3年目には数えるほどになっていました。

そんな厳しい修業時代を経て、順調に出世し、現場所長となり、意気揚々と仕事に励んでおりましたが、私事不幸と会社のゴタゴタが重なり、思い切って退職し、愛媛へ帰り、家業を手伝うことになりました。

それまでは建築士の資格を取ろうとは思っていませんでしたが、父親がいつも「大学まで行かせてやったのだから、建築士の資格ぐらいは取れよ」と口癖のように言っていたので、愛媛に帰ってきた1年目が勝負だと思い、頑張って1級建築士の資格を取りました。そして何気なく建築士会に入会し、どのような活動をしているかもわからないまま、たまに士会活動に参加していたのですが、そんな中、あの強引で有名な松本一師さんとの出会いをきっかけに、建築士会に大に関わることになりました。

それは、一本の電話から始まりました。「松山支部の青年メンバー数名で、今後の活動について話し合いがしたいから、参加してくれん」そう誘われて建築士会館2階へ行き、何が始まるのかと思いきや、ロンハー張

りに巧妙に仕組まれた罠にまんまと引っ掛り、松山支部青年委員会 活性化事業責任者に任命されてしまいました。そこからは、松本さんの掌で躍らされているがごとく、士会の一員、活性化事業責任者として、何かしなければと思うようになり、活動させていただいております。

あれからもう5年が経ちますが、お陰様で、その間に色々な方と知り合うことができ、見識も広げることができ、今ではあの強引な誘いを感謝しております。

最後に松山支部 青年委員会 活性化事業責任者としてご報告とお願いです。近々、松山支部 青年委員会のfacebookを立ち上げる予定です。それに伴い、青年委員会のイベントの案内等もfacebook上にアップする予定ですので、今まで、あまり士会活動に参加されていない青年会員の皆様も、是非、色々なイベントに顔を出していただきますようお願いいたします。

写真は弊社の近年の代表的な作品です。



小田小・中学校改築工事



サービス付高齢者向住宅サファイア新築工事

# ネパール大地震義援金のお礼

理事（大洲支部長） 神田 孝一

本会総会時におきましてネパール大地震義援金をお願いしましたところ多数の方にご協力いただき有難うございました。（義援金の額：11,000円）

7月7日にネパール大地震の報告会が愛大で開かれ、当日、浄財をネトラ准教授に手渡しました。ネパール自体一人当たりGDPは700USドル程度（日本36000USドル）の貧しい国ですので、報告会では復興がなかなか進まない状況の説明がなされました。ネパールはエベレスト等を形成している地殻変動や断層が多く、地震の巣でもあり、今回は地震の空白地帯で起こったとのことでした。

今後も何年かに一度大きな地震が起きる可能性が有るようです。愛媛大学ではカトマンズに現地研究センターを開設していますが、今後人数を増やし、建築や構造物の耐震性や防災計画の必要性を広くネパール政府や現地

大学教育機関に働き掛けてゆくそうです。

ネトラ准教授はネパールでの防災の中心的存在になれるのではないかと思います。

ネパールの日も早い復興を願うものです。



神田理事よりネトラ准教授に義援金を託す。

## 平成 27 年国土交通大臣表彰に寺尾保仁さん受賞

平成 27 年 7 月 10 日に、建設事業関係功労者として表彰されました。おめでとうございます。

## あなたの原稿をお待ちしています。

公益社団法人として、広く異業種や全ての皆様から建築士会の枠を超えて原稿を広く募集して広く購買して頂くようにしていきます。是非、寄稿して頂きますようお願い致します。本年度は年6回発行となります。(尚、営業的色彩の濃いものにつきましては、掲載されない場合もありますので、ご了承下さい。)

「いしづち」の本年度の原稿締切日

平成27年 11月号(107号) 9月24日(休)

※ 校正印刷の関係で締切延長の最終期限は一週間後の木曜日とします。

※ 1ページ写真込みで2150文字(25文字×43行×横2段)のWORD様式を事務局で用意していますのでご活用ください。

写真は1ページ当たり5枚程度まで題名を付けて添付ください。

また宜しければ投稿者の写真(免許写真程度の顔写真)を添付ください。

会員の皆様のご参加をお待ちしております。また記事等についてのご意見・ご感想もお寄せください。

(尚、投稿された原稿につきましては、要旨を変えない程度の若干の訂正等を加えることがあるかも知れませんので、予めご了承下さい。)

この誌面を通じて、会員の方々、そして一般の方々にも、建築についての対話等の輪が広がれば、と願っています。  
情報・広報委員会

## 読者の声欄

「いしづち」に関するご意見・ご提案などをお寄せ下さい。お待ちしております。

「いしづち」編集委員会(士会事務局内)宛  
— FAX 948-0061 —

## 編集後記

この「いしづち」には、私は広報委員の頃からすれば、もう5年以上かかわっていることになりましたが、「いしづち」についてよく耳にしたのが、“ゴミ箱行き特急”といった言葉でした。事実私も「いしづち」に携わる前は、その“特急券”をよく使っていました。

委員長を拝命して一年余り経ち、それが相変わらずの“特急”なのか、それとも“急行”くらいの速度にはなったのかどうか、今のところ“一方通行”ゆえに何も分かりませんが、理想的にはせめて“各駅停車”くらいにはならないものか、と願っています。などと言っている内に日は暮れて行く。

今回はまた新しく、新多賢一氏より左官のお話を頂いております。他の分野においても、人に伝えたいお話があれば、お寄せ下さい。  
(玉乃井 公和)

本誌の表紙の版画を提供して頂いております、山田きよ氏の版画展が今年も下記の日程で開催されます。実物には、プリントにはない美しさがあります。一度ご覧下さい。

### 【山田きよ版画展】

平成27年11月23日(月)～29日(日) 山荘画廊(大洲市大洲)

## 〈いしづち〉2015 / 9

平成27年9月発行

発行人 **会長 寺尾 保仁**

発行所 **公益社団法人 愛媛県建築士会**

〒790-0002 松山市二番町四丁目1-5

TEL (089)945-6100 FAX (089)948-0061

http://www.ehime-shikai.com E-mail: info@ehime-shikai.com

印刷所 明星印刷工業株式会社

情報・広報委員会・広報委員

委員長 玉乃井公和 副委員長 大上 恵子

編集委員 二宮 初子 宮内 理 越智 麻衣 石丸真智子 小笠原 元 水野日出夫